

赤、黄、紫…色とりどりのつぼみを付けたパンジーやビオラのポット苗約10万個が、10坪のガラス温室いっぱいに並ぶ。花苗農家尾崎勝さん(68)が花壇用苗を生産する「グリーンプラネット尾崎」(岡山市東区草ヶ部)で、軽度の知的障害がある山田晴美さん(53)が手際よく肥料をやる。

「昔から花が大好きで、花に囲まれていると元氣が出るんです」と笑顔を見せる山田さんは、3歳の時にかかった日本脳炎が原因で障害を負った。10代から喫茶店や介護施設などで働いたものの、職場になじめず仕事を転々としてきた。2012年からここで働くようになり、仕事はどの職場よりも長く続いているという。

尾崎さんの農場では約30人が働いており、このうち18人が山田さんら知的精神障害者。日々の作業量は膨大で、苗一つ一つに手作



■ 岡山のノウフク

① 先駆者

業で肥料や水をやり、1日最大2万個の苗をホームセンターや市場向けに出荷する。「一人一人が貴重な戦力で、うちには欠かせない存在」と尾崎さんはうれしそうに話す。

■ 柔軟に対応

もともとマスカットを栽培していた尾崎さんは1995年、バブル経済崩壊の影響や阪神大震災によるブドウの販売不振などから花苗の生産に転換した。一般家庭でもガーデニングを楽しむようになったこともあり参入



ポット苗に肥料をやる山田さん(右)と、作業を見守る尾崎さん

ズーム 農家の人手不足と障害者の就業率 国の統計によると、2017年の農業就業人口は07年に比べ約4割減の181万6千人。平均年齢は66・7歳と高齢化も深刻化している。一方、企業などで働く障害者(15・64歳の年齢層別の就業率は最も低い60・64歳(精神)で8%。最高は20・24歳(知的)の70%。ほぼ全ての年齢層で健常者の就業率を下回っている。

た「一億総活躍プラン」で、双方の課題をクリアする一手として農業分野での障害者就労支援を盛り込んだが、岡山ではその約20年前から「農福連携」の道を模索してきた。障害者とともに地域農業の未来を拓く尾崎さん。障害者の得意、不得意を把握した上で作業をお願いすると想像以上の活躍してくれる。障害者の力を農業の振興に役立てたい。「先駆者」の言葉に感慨がにじむ。

■ 連携を模索

尾崎さんは農家や中国四国農政局、岡山労働局などをつくる「岡山地域農業の障害者雇用促進ネットワーク」の会長を当

障害者の力で農業振興

したもの「細かな手作り返し指導しなければならなかったりした。そのため、彼らとコミュニケーションをとるながら、転機は97年。知り合いの福祉作業所職員から精神障害者2人の雇用を頼まれたのがきっかけだった。

受け入れてみると、障害者との接触が多くなると、繰るにつれ「モチベーション」が上がる。徐々に雇用が増え、障

害者が花苗の温室に出る。担い手不足に悩む農家らに求めている。先進的に取り組んできた岡山の「ノウフク」の現状をルポし、さらなる発展に向けたヒ

後継者不足が深刻な「農業」と、働く場所が少ない障害者や高齢者の「福祉」をマッチングさせる「農福連携」が注目されている。先進的に取り組んできた岡山の「ノウフク」の現状をルポし、さらなる発展に向けたヒ

「銀沫(ぎ)を使ったとろろ」を「銀沫」の直売も(086)1

(水野雅文)

情報

◆ 感謝祭

8日前9時、岡山市江川の「健康の里」で、山地域特産品「銀沫(ぎ)を使ったとろろ」を「銀沫」の直売も(086)1

円安で餌

て原料の生りしている包装資材や昇している「昔なつクリン」や「牛乳ソフトパーティー」で、現在売すところの価格以外の10%程度引